会山行 No.2217

夜間歩行訓練　丹沢：烏尾尾根 - 三ノ塔

◆日程　　2018 年 10 月 27 日（土）～28 日（日）
◆メンバー　L ： 岡村、前田、小山田、池本、津澤、西山、小濱

なぜ日没までに行動を終わらせる必要があるのか, 日帰りでもなぜヘッドランプが必要か等, 身をもって思い知る・・・という趣旨で計画された。

10 月 27 日(土)　天候：晴れ、霧

集合は渋沢駅 18:00、7 人＋ジムニー1 台。まず小山田さん・池本さん・津澤さんの 3 名が前田さん運転のもと先行し、残る岡村さん・小濱さん・西山の 3 名は 18:18 発大倉行のバスで後を追った。終点で降り風の橋を渡って林道に下ると前田さんの車が待っている。先の 3 名は竜神の泉で下車し新茅山荘にむけ歩き始めているという。4 人乗りの軽は人間・それぞれのザック・翌日の岩トレの道具などでいっぱいだった。

林道でシカ三頭に出くわす。一頭はしばらくアスファルト上、われわれの車の前を走っていて、お尻の白いハート型がきれいだった。

途中で 3 名を追い越し、新茅荘で荷物をおろし合流。

19:15 に歩き始めた。寒さ対策をしてきたが、つづら折りの急登で夜とはいえ化繊のロン T で汗だくになるくらいだった。かわるがわるトップを歩き、この道違った、と引き返す場面が幾度かあった。人工物がある！と思ってよく見ると切り株である。自分は幻覚を見やすいタイプなのだろう。

文化七年建立の狗頭観音の手前は緩く広い斜面になっていて、細かい枝や葉が積もり、道じゃなさそうだな・・・でも方角（北に向かっている）と地形（両側が斜面になっている）的には合ってそうだし・・・と不安を覚えた。

中腹からは市街の灯りを望むことができ、登頂後の夜景に期待が高まった。

樹林の間から稜線上にかなりの明るさの光を見たときには山小屋か？先客か？と話題になったが十五夜を 3 日過ぎた月であった。道迷いの状況では、「人がいるかも」と明るさに誘われてそちらを目指してしまうという落とし穴があるかもしれない。

そしてさんざん期待したあげく、上がった先は一面ガスの中で眺望なしであった。

113「6」m の烏尾山で写真を撮影後、いったん鞍部に降り登り返して三ノ塔の小屋に着く。ビールを飲みつつおでんにすき焼き風鍋の準備、岡村シェフが腕を振るってくれた。逐一「濃いかな？」と前田さんに味見と感想を求めていて、仲睦まじい新婚さんのようであった。ワンカップにお燗をつけたものを小濱さんと津澤さんと分け合って飲んだ。

寝床としては小山田さんと池本さんは 2 人用ステラリッジを小屋の土間に張っていて、あたたかそうであった。のこる 5 人はベンチの上にマット・シュラフを敷いたが、このベッドも冷気が上がってこず、快適であった。　（記：西山）

CT：新茅荘付近広場 19:15 - 烏尾山 21:00 - 三ノ塔 21:45

10月28日(日)　天候：晴れ

5:30起床、シェフが生玉ねぎからオニオングラタンスープ風パン粥を作ってくれる。からだが温まり、元気が出た。

前夜迷った場所を確認しながら下っていく。実際に迷いやすい分岐ではあったけど、朝の光の下で見るとやはり見え方が違っている。ヘッドランプは意識して遠くを照らすようにしても一度に見える範囲が狭く、視程もかなり落ち平面的な絵になることも実感できた。のぼりは特に尾根に出れば両側が切れ落ちていておのずと歩けるところは決まってくるけど、くだりでは迷い放題であり、沢へ入ってしまったり斜面を滑落したりとより危険が多そうだと感じた。

ほか明るいところで確認したこととして、カラフルな手編みの前掛けをつけたお地蔵さんにみんな気づいてるものと思ったらそうでもなかったこと、夜露で滑る岩場を何気なく通過してたけど改めて見ると実は危ない場所だったことなど発見があり、暗い中での行動は思わぬ結果を招きうると感じた。

行動しない勇気、その裏付けとなるビバークの能力向上というのも課題になるかもしれない。歩いていて「ここなら一晩寝れるかな？」「ここは居心地よさそうかな？」ということも考えてみた。

自身にとっては山の会に入って初めての泊り山行であり、実りあるものであっただけでなく、みんなで夜をすごし朝を迎えるということがうれしかった。

懸垂岩での岩トレに続く・・・・・・　　（記：西山）

CT：三ノ塔7:00 - 新茅荘付近広場8:35